

J **apanese text**

2009年 春/夏号 日本語編

アート

アーティスト・インタビュー

尾上菊之助

——若き歌舞伎役者に与えられた越えるべき壁

写真=篠山紀信 文=山下シオン 協力=松竹株式会社

p.114

歌舞伎には女形といって、男性が女性を演じるという表現方法がある。昨年、尾上菊之助さんはこの女形屈指の大役である『伽羅先代萩』の政岡を演じた。これは戦後では史上最年少を記録する出来事である。歌舞伎という日本の伝統芸能の未来を担っている一人である彼は現在31歳。3月には、シェイクスピアの国であるイギリス・ロンドンで、シェイクスピア作品を歌舞伎で上演する。

「歌舞伎は知識があればより楽しめる演劇ですが、同時に知識がなくても楽しめる作品も必要だと思います。私にとって『NINAGAWA十二夜』は、まさに歌舞伎をより深く知り、ゼロから作り上げていく力を試されている作品。古典の作品に受け継がれてきた演技を継承するとともに、新しい作品を生み出すことも役者にとって必要なことです」

『NINAGAWA十二夜』が初演されたのは、2005年の7月のこと。原作を歌舞伎に翻案したもので、2007年に再演し、好評を博してきた。従来の歌舞伎では主演の役者が演出を手がけるのに対し、この作品は世界的評価の高い演出家の蜷川幸雄さんが演出した。

「演出家がいるということは、一つの旗印に向かっていくように、作品全体の色の統一感、調和が取れるのだと実感しました。初演においてはどうすれば歌舞伎になるかということに重きが置かれていて、『十二夜』を歌舞伎に引き寄せているというイメージでした。一つの演目で役者が三役やることも、早替わりをすることも歌舞伎では当たり前の手法です。また、役を体の動きで表現する歌舞伎ならではの身体表現の美しさは楽しんでいただけたと思います。しかし、歌舞伎に対する予備知識がないロンドンのお客さまはあくまでもシェイクスピアの作品としてご覧になると思います。そこで、もう一度原作に立ち返って、場面ごとにシェイクスピアが何を伝えようとして書いたのかを考え直しました。例えば

どんなに辛いことがあっても前向きに生きていく琵琶姫（ヴァイオラ）の気持ちを一つ一つの場面に込めていきたいと思っています。ロンドン公演は徐々に見えてきた目標ですが、大きいハードルであることを実感し、緊張しています」

奇しくも『十二夜』が初演された年は1601年から1602年とされており、歌舞伎が発祥した年は1603年といわれる。今回のロンドン公演は同じ時代に生まれた2つの文化が時を超えて融合するということだ。若手きつての歌舞伎役者によってどのような成果を出すのかが期待される。

■プロフィール

五代目尾上菊之助 1977年8月1日生まれ。84年2月歌舞伎座で『絵本牛若丸』の牛若丸役で六代目尾上丑之助を名乗り初舞台を踏む。歌舞伎以外の舞台や映画などでも活躍。父は七代目尾上菊五郎、母は女優の富司純子、姉は女優の寺島しのぶ。

金氏徹平

——小さな世界が積み重なって、大きな世界に

写真=坂本正行 文=白坂ゆり 編集協力=清水千佳子

p.115

横浜美術館では史上最年少での個展開催となる、1978年生まれの注目アーティスト、金氏徹平。個展に向けて制作中のスタジオを訪ねた。

連結パイプ、ペットボトル、地図、おもちゃ、流木などが所狭しと置かれている。それらはすべて作品の素材だ。フィギュアの頭髪で覆われたモンスターや、積み重ねて白い樹脂を掛け流したタワーなど、既存の意味を離れて、見たことのない有機的な塊へと姿を変えていく。また、シールをはがした後の、枠だけが残った抜け殻のようなシートで構成した平面作品などもある。付け加える行為と差し引く行為が、リズムを生み出す。

「洪水の後に、元々は無関係なものたちが流れ着いて固まっていることがありますよね。都市の中でも森の中でも、何かがつくられたり消えたりしながらバランスを保っています。そんな人為と自然の力が共存する、カオスだけど秩序ある状態を表現したい。そのため、すべてイメージどおりにつくるのではなく、重力で樹脂が垂れてできた形や、コーヒーの染みなど、自身の意図を超える方法を取り入れて制作して

います。また、失敗もなるべく生かします。そうして、あとひとつ足しても引いてもいいような地点で、(生命感を持って)動き出す感じが現れたらフィニッシュとしています」

会場は、真っ白な世界から次第に色を帯び、極彩色の世界へと移り変わる。観客は、都市のような森のような謎めいた空間を、細部と全体を楽しみながら探索することになりそうだ。「映像と平面をミックスした7mの作品などにもチャレンジしますが、僕の作品の大半は、小さな部屋の中でつくられたもの。空間の流れの中で、大きな世界を連想してもらえたらうれしいですね」。

小さなものをつくり続けて大きな世界をつくる。彼の創造力は、子どもの頃から培われてきた。「鍵っ子だったので、一人で積み木で遊んだり、布でぬいぐるみをつくったりしていました。ものに存在感が生まれ、部屋に飾ると雰囲気が変わることが楽しかった。その頃から、つくる喜びや変化に対する驚きを感じていました。現在でも、わからないものを受け入れたり、絶対だと思っていたことを覆す可能性を見つけたり、制作を通じて実生活にも役立っていることが多いです。異質なものが境界を越えて溶け合うことや、社会通念から開放されることが、僕が感じる“自由”ですね」。

一見、少年の遊びのような金氏ワールドは、多様な価値観を受け入れることで得られる心や行動の広がりを見せてくれるだろう。